

簡便・安価なニホンザルの個体群モニタリング手法の開発を目的に、本種が発する「音声」を群れ密度の間接指標として利用するための予備実験を試みた。本研究では、地形・植生・環境雑音の多寡が異なる(1)スギ・ヒノキが優占する平地林、(2)コナラ林が優占する傾斜地、(3)スギ人工林が優占する平坦地、(4)ブナ林が優占する傾斜地、(5)ブナが優占する平地林、を調査区として指定し、音源(すなわちニホンザルの個体)からの距離に応じた無人音声記録装置による本種の音声記録成功率を評価した。主な手順として、上記5つの調査区に音声記録装置を設置し、音源から10m間隔(最大200m)で、あらかじめ録音したニホンザルの音声(クーコール、ディストレスコール、威嚇声)をスピーカーから発生させた。その結果、地形・植生・環境雑音・音声種によって音声記録成功率に差があることは明らかとなったが、どの調査区でも100m程度までは音声記録に成功した。このことから、他の間接指標(例えば足跡・糞・カメラトラップ)よりも、音声はより広範囲を簡便にカバーできる指標となりうる可能性がある。

B-20 現代型オナガザル上科の起源に関する研究

國松豊(京都大・院・理) 所内対応者：平崎鋭矢

現在、日本・ケニア合同調査隊が、東アフリカのケニア共和国北部、東部大地溝帯の東の縁に位置するナカリ地域で、中新世後期初頭の化石を産出するナカリ累層を対象にして古生物学的野外発掘調査をおこなっている。この調査により、これまでに多数の脊椎動物化石や植物化石が採集された。霊長類としては、アフリカ大型類人猿と人類の共通祖先が生息していたと推測される時代から見つかった数少ない類人猿化石のひとつ、*Nakalipithecus nakayamai*をはじめとして、他にも原始的な大型類人猿や複数の小型「類人猿」、コロボス類を主とした複数種の旧世界ザル化石を発見した。ナカリから産出したコロボス類などは、現代型オナガザル上科としては、知られているなかではほぼ最古と言ってよいものであり、旧世界ザルの進化研究において、きわめて興味深い資料である。これらの霊長類化石、特に旧世界ザル化石の解析のため、本共同利用研究では、霊長類研究所所蔵の現生種骨格標本から歯牙や頭骨の比較データを収集することを目的とし、本年度は主にコロボス亜科とオナガザル族の歯牙・頭骨の計測及び写真撮影をおこなった。

B-21 ニホンザルのアメーバ感染に関する疫学研究

橘裕司(東海大・医)、小林正規(慶応大・医)、柳哲雄(長崎大・熱研) 所内対応者：岡本宗裕

最近、赤痢アメーバ(*Entamoeba histolytica*)と形態的には鑑別できない新種のアメーバ(*E. nuttalli*)がサル類から見つかっている。本研究の目的は、ニホンザルにおける腸管寄生アメーバの感染実態を明らかにすることである。今年度は兵庫県洲本市(淡路島)において、野生ニホンザルの糞便50検体を採取した。直接鏡検では、*Entamoeba* 属の他、ヨードアメーバ、小形アメーバ、ブラストシスチス、鞭虫卵、糞線虫卵が観察された。糞便からDNAを抽出し、赤痢アメーバ、*E. dispar*、*E. nuttalli*、*E. chattoni*、大腸アメーバ(*E. coli*)、*E. moshkovskii*について、PCR法による検出を試みた。その結果、*E. chattoni* が全検体において陽性であり、大腸アメーバが54%の検体において陽性であった。しかし、その他の4種の*Entamoeba* は全く検出されなかった。また、*E. chattoni* について株分離を試みたが、このアメーバ種の培養は困難であり、分離株を得ることはできなかった。これまでの他地域における調査でも、*E. chattoni* 感染は高率に認められ、赤痢アメーバは検出されていない。一方で、*E. dispar*、*E. nuttalli*、大腸アメーバの感染の有無については地域差のあることが、今回の調査においても確認された。

B-22 ニホンザル群における食物摂取と栄養状態および繁殖成績について幸島群と高崎山群の比較

栗田博之(大分市教育委員会・文化財課) 所内対応者：濱田穰

幸島での写真計測による体長計測は、例年通り8月に成熟メス12個体について行った。高崎山成熟メスでは、加齢による体長の短縮は認められないが、幸島群ではまだ調査年数が少なく、年齢変化の傾向を明らかにするには至っていない。

また、サルの重要な自然食物であるアラカシ・マテバシイ・ウラジロガシの堅果生産量を調査するためのシードトラップを8月に幸島内の4箇所に設置した。12月までの間、1ヶ月に一度、貯まった堅果を回収し、結果としてアラカシの堅果33個とウラジロガシの堅果36個を確認した。なお、高崎山に設置した5箇所のシードトラップからは165個の堅果を回収し、すべてがコナラであった。幸島・高崎山の両地域とも、サルなどの動物が貯まった堅果を強奪したり、トラップを破壊したりするのを防ぐ工夫を行った結果、概ねその目的は達成できた。

また、2011年度より幸島群において餌獲得量の調査を開始したが、2012年度も台風接近などにより2日間しか調査ができなかった。高順位メスと低順位メス各1頭ずつの餌(コムギ)獲得量調査を行い、2ヵ年でまだ4個体のデータに留まっているが、高崎山個体に比べると、獲得量の順位による差は高崎山群に比べると幸島群の方が小さい傾向が示されつつある。

今後、幸島群と高崎山群の間での餌獲得量・体サイズ・繁殖成績についての調査を継続し、それぞれの実態をより詳細に解明してゆきたい。

B-23 マカク歯髄幹細胞を用いた歯髄再生療法の確立

筒井健夫(日本歯科大・薬理学講座) 所内対応者：鈴木樹理

平成24年度は、アカゲザル2例(4歳)とニホンザル1例(7ヶ月)から永久歯歯髄細胞および乳歯歯髄細胞を採取